

2003年11月9日

御自分を隠される神

【聖書】イザヤ書6章1～13節 イザヤの召命

1 ウジヤ王が死んだ年のことである。わたしは、高く天にある御座に主が座しておられるのを見た。衣の裾は神殿いっぱい広がっていた。2 上の方にはセラフィムがいて、それぞれ六つの翼を持ち、二つをもって顔を覆い、二つをもって足を覆い、二つをもって飛び交っていた。3 彼らは互いに呼び交わり、唱えた。

「聖なる、聖なる、聖なる万軍の主。主の栄光は、地をすべて覆う。」

4 この呼び交わす声によって、神殿の入り口の敷居は揺れ動き、神殿は煙に満たされた。5 わたしは言った。「災いだ。わたしは滅ぼされる。わたしは汚れた唇の者。汚れた唇の民の中に住む者。しかも、わたしの目は王なる万軍の主を仰ぎ見た。」

6 するとセラフィムのひとりが、わたしのところに飛んで来た。その手には祭壇から火鉢で取った炭火があった。7 彼はわたしの口に火を触れさせて言った。

「見よ、これがあなたの唇に触れたので、あなたの咎は取り去られ、罪は赦された。」

8 そのとき、わたしは主の御声を聞いた。「誰を遣わすべきか。誰が我々に代わって行くだろうか。」わたしは言った。「わたしがここにおります。わたしを遣わしてください。」

9 主は言われた。「行け、この民に言うがよい よく聞け、しかし理解するな よく見よ、しかし悟るな、と。」

10 この民の心をかたくなにし 耳を鈍く、目を暗くせよ。目で見ることなく、耳で聞くことなく その心で理解することなく 悔い改めていやされることのないために。」

11 わたしは言った。「主よ、いつまででしょうか。」主は答えられた。「町々が崩れ去って、住む者もなく 家々には人影もなく 大地が荒廃して崩れ去るときまで。」

12 主は人を遠くへ移される。国の中央にすら見捨てられたところが多くなる。13 なお、そこに十分の一が残るが それも焼き尽くされる。切り倒されたテレピンの木、樅の木のように。しかし、それでも切り株が残る。その切り株とは聖なる種子である。

【序】神さまはホントに居るの？

今はもう42才の長男が小学校一年生になった5月、初めての遠足の時のことです。家内が都合が悪かったので私が一緒に参加しました。気持の良い木陰に円く座ってお昼の弁当を皆で食べました。私は長男と向かい合い、何時もしている通り「さあ、お祈りしよう」と言って、食前のお祈りをしました。

「このお祈りをイエスさまのお名前によって捧げます。アーメン」と終りの言葉を言って目を開けましたら、彼が体を二つに折るようにして深々と祈りの姿勢をとっていました。「おやおや、何と敬虔ぶかいこと」と感心して弁当を食べ始めました。そのうちにハット気がつきました。彼は両手を組み合わせて祈る姿勢を友達に見られたくなかったのです。

彼は生まれてからずっと教会の中で育ちました。幼稚園も教会付属です。神さまがいらっしゃ

ること、その神さまにお祈りすることは、ごく自然に当たり前のことだったのです。ところが待ちに待った小学校に進むと、お祈りが全くありません。給食が始まりましたが、尊敬してやまない山本先生も、またクラスの誰もが祈りしないで食べ始めます。彼はびっくりしました。そして家に帰ってきて母親に聞きました。「神さまってほんとに居るの？」

教会学校の小学生たちの中にも、お祈りの時にそっと目をあけて周りを見回している子がいます。「先生、〇〇ちゃんはお祈りの時に目を開けていたよ」と非難されて、その子は「だって神さまがほんとに居るかどうか見たかったんだもの」と弁解していました。そうですね。大人だってこの目で神さまのお姿を確かめたい気持を持っています。

「フセインが見つからないからといって、フセインは居ないとは言えない」「大量破壊兵器が見つからないからといって、兵器がなかったとは言えない」と日本の総理大臣は国会で答弁していました。彼は「神さまが目に見えないからといって、居ないのではない。神さまはいらっしゃる」といって神を畏れ敬い、信じるのでしょうか。日本人が皆そうであって欲しいものです。

もしも神さまが私たちの目で見てわかったら、もっと多くの人が「神さまなんか居ない」という迷いにとらわれず、信じる事が出来るのにはおれませんか。どうして神さまはそうならぬのでしょうか。

先週は、自分の中には、他人の目も自分の目も届かない**隠れた自分**が居るということに関連して、**隠れたところにおられて、隠れたことを見ておられる神**について少しふれました。今日は隠れたところにおられる神さまについて、イザヤの預言から学ぶことにしました。

[1]聖なる神

旧約聖書はキリスト教の母体であるユダヤ教の聖典です。キリスト教は旧約聖書と新約聖書を併せて聖典としています。救い主メシヤを待ち望んで書かれているのが旧約聖書で、救い主は来られた、十字架で死なれたナザレのイエスこそメシア(キリスト)であるという信仰を証しているのが新約聖書です。新約聖書を信じないユダヤ教徒は今でも救い主の到来を待ち望んでいます。

旧約聖書はモーセ五書(律法)、歴史、文学、預言書と四部分から成っています。預言書は大預言書4と小預言書12の16書ありますが、その第一がイザヤ書です。イザヤはBC740年頃、20才位で神さまからの召命を受けて預言者になりました。それから約60年間南王国ユダで預言者としての生涯を送り、マナセ王の時に殉教の死を遂げたのではないかとされています。彼の時代に北王国イスラエルがアッシリヤに滅ぼされています(BC721年)。

今年の初めに新約聖書の最後の書であるヨハネの黙示録を10回にわたって読みましたが、ヨハネが迫害の最中に天上の礼拝の様子を幻を見るように示されています。そこでは「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、全能者である神、主、かつておられ、今おられ、やがて来られる方」(4:8)と

いう讚美が昼も夜も絶え間なく歌われていると記されていました。

青年イザヤも名君ウジヤ王が死んだ時、国の将来を案じて神殿で祈っていて、天上の御座におられる神を見ます。そして同じような賛美歌を聞きました。「聖なる、聖なる、聖なる万軍の主。主の栄光は、地をすべて覆う」。こうして彼は神の臨在にふれて、神の召しに応じます(イザヤ6章)。この**聖なる神**というメッセージはイザヤ書全体を貫く信仰です。

「聖」という字は「ひじり」と読み、儒教では「徳の最もすぐれた人」を言います。また私は天皇を神と崇める教育を受けましたが、「聖」は「聖上」と言って天皇を表しました。また「道をきわめた第一人者」を「樂聖」とか「劍聖」といいます。また「清らかで汚れのないこと」「尊く冒しがたいこと」を「神聖」と言います。

しかし聖書に使われている「聖」はそれらとは全く違う、独特のものです。旧約聖書のヘブル語では「分ける」「分離」を意味する言葉です。ですから神を「**聖なる方**」と言えば、「**他の一切のものとは分離された、質の全く異なるお方**」ということになります。では神さまが私たちとは質が全く違うお方とはどういうことなのでしょう。

イザヤは神殿で聖なる神さまの臨在にふれた時に叫びました。「災いだ。わたしは滅ぼされる。わたしは汚れた唇の者。汚れた唇の民の中に住む者。しかもわたしの目は、王なる万軍の主を仰ぎ見た。」(5節)

ウジヤ王は北王国との戦いに決定的敗北した父の後を受けて16才で南王国の王になり、52年間に近隣諸国に優り強くて繁栄した国になりました。その王が死んだのです。繁栄は道徳的な腐敗・墮落をもたらしました。北にアッシリア、南にエジプトの大国にはさまれて、小さな国が新しい王の下に、これからどう生き延びていくのでしょうか。青年イザヤはいてもたっても居れない心境でした。

彼は貴族の一人でした。自分が神の代理者として民を教え、叱り、導かなければならないという思いを抱いたに違いありません。そのような思いで祈っている時に、彼は突然自分もまたこの国の人々と同じく、繁栄の中での腐敗・墮落にどっぷりとつかっている**罪深い者に過ぎないのだ**ということ痛切に自覚させられたのでした。

自分が真先に神の裁きを受けて滅びる者だという思いに襲われて、震えおののいたのでした。彼の正義感は打ち砕かれ、徹底的に謙遜にさせられました。そうしたら神さまは神さまの火、聖なる霊をもってイザヤの汚れを清めてくださり、預言者として立たせてくださったのでした。

神さまは、自分とは全くかけ離れていて、質が違い、全てから超越しておられます。私が人間の間では多少自信を持ち、何かやれそうだと思えても、神さまの前に立つと、先ず自分が持ち合わせている自信や自負心が**徹底的に打ち砕かれてしまう**。そういう神さまを**聖なる神**とイザヤは表現した

のでした。

[2]民の心をかたくなにせよ

預言者の任務は、神の言葉を神さまに代わって人々に語るものです。神が彼に語れとお命じになる言葉を、その通りに間違いなく語らねばなりません。イザヤは神さまから「行け、この民に言うがよい」と命じられました。何を語るのか。「よく聞け、しかし理解するな。よく見よ、しかし悟るな」と。何とも**不可解な言葉**です。

私たちはよく理解し、悟ってもらうために語るのではないのでしょうか。9 節の「よく聞け。よく見よ」は口語訳では「くりかえし聞くがよい。くりかえし見るがよい」、新改訳では「聞き続けよ。見続けよ」です。繰り返す、連続して見聞きしたら、理解し悟るはずなのに、そうならないのです。

10節「この民の心をかたくなにし、耳を鈍く、目を暗くせよ」。口語訳では「この民の心を鈍くし、その耳を聞こえにくくし、その目を閉ざしなさい」。新改訳では「この民の心を肥え鈍らせ、その耳を遠くし、その目を堅く閉ざせ」です。英訳では「かたくな」を dull の他に calloused(皮膚が固くたこになった様に無感覚・冷淡な状態)と表現しています。

私は毎日素足で竹刀を振りますから、左の手の平と足の裏に豆ができ、皮膚が固くなっています。これは私にとっては勲章のようなものです。ところがイザヤが神の言葉を繰り返し語り続けるとイスラエルの人々の心に豆ができて、逆に無感覚・冷淡・鈍感になっていく。

これでは聞く人々が「耳を鈍くし、目を暗くし、心で理解しようとせず、悔い改めていやされることがないようにするために」預言しているようなものです。イザヤが熱心に神の言葉を語れば語るほど、人々は神の言葉を素直に受け入れようとはせず、無感覚になっていくか、自分の考えに固執して強情に拒否し続ける「かたくな心」になっていきます。そこでイザヤは、聖なる神は人々の心をかたくなにするために私を預言者としてお召しになったと自覚したのでした。

どうしてこのような事態が生じるのでしょうか。神さまが聖なる方、私たちの思いを超越するお方だからにほかなりません。そこでキリストの福音を世界に広めたパウロは、イザヤの預言を「目が見もせず、耳が聞きもせず、人の心に思い浮かびもしなかったことを、神は御自分を愛する者たちに準備された」(第一コリント 2:9)と要約しました。私たちを超越しておられる聖なる神さまは、まさに目が見もせず、耳が聞きもせず、人の心に思い浮かびもしなかったことをなさって、救いのみ業を進めるお方なのです。

そうです。神さまが救主としてこの世に来てくださった時のお姿は、当時の世界ローマ帝国の片隅、植民地ユダヤのベツレヘムという小さな町の家畜小屋の中で誕生した貧しいヨセフとマリアの子ども**イエス**というお姿でした。私たちの持ち合わせている考えからすれば、いと高き神と**家畜小屋**での誕生とはどうしても結びつきません。いと高き神の救い主と、茨の冠をかぶせられ、人々の嘲

りのなかで**十字架**にはりつけになり、惨めな姿で死んでいかれるイエスとどうしも結びつきません。

だから神さまはイエス・キリストご自身が言っておられるように、私たちにとっては、**隠れた所に居られるお方** (マタイ福音書 6:6、18)です。それをイザヤは「まことにあなたは御自分を隠される神」(45:15)と言いました。

では神さまは私たちを超越していてわからないお方なのだから、その言葉をいくら聞いても理解できないのは当然だ。悟れ、そして悔い改めよと言われたって、それは出来ないと突っ張っていてすむことなのではないでしょうか。

[結]打ち砕かれた心

親や教師が一番てこずるのは、子どもや生徒がこちらの言うことを素直に聞いて、その通りに実行してくれないことです。基本的な大事な教えは先ずその通りに行き身につけてもらわなければなりません。そうしなければ次に進めないのです。それを強情に拒んで自分にしたいようにしようとします。本当に困ります。

剣道では「守破離」という修業の心構えが言われています。先ず師範の教えを忠実に固く守って、剣道を確実に身につけること。次に他の教師の教えも学び、取り入れてそれまで固く守ってきたものを破って幅を広げていきます。そして最終的に自分に一番合った独自の剣道を身につけるのです。

全くの初心者は神妙に言われた通りをしようとしますが、少し出来るようになってもう自分の我が出てきて、素直に聞かなくなる人が出てきます。剣道では五段になってやっと剣道をやっていると云える段階です。自分独自の境地など八段になってからでしょう。それが初段や二段三段でもう私の強い人がいるのです。こういう人は結局大成しません。

これは剣道だけではないと思います。私たちは自分の理性や感情が納得しないことにはなかなか聞き従おうとしません。これも納得しなければ従わないという我をはっていることになるのではないのでしょうか。何しろ聖なる神さまは私たちから超越しておられますから、神さまの思いと行動はわたしたちの理解を超えています。だから納得しなければ聞き従わないと言っているのは、神さまに聞き従うことなど私のなかに出てきません。

先ず私たちの内にある我を捨てなければなりません。だから神さまはイザヤの自負心や自信を先ず打ち砕いて謙遜にされたのでした。そしてイザヤの口を通してこうお語りになっています。「高く、あがめられて、永遠にいまし、その名を聖と唱えられる方がこう言われる。**わたしは、高く、聖なる所に住み、打ち砕かれて、へりくだる霊の人と共にあり、へりくだる霊の人に命を得させ、打ち砕かれた心の人に命をえさせる**」(57:15)

結局、打ち砕かれてへりくだる霊の持主が神さまから、豊かな命をいただけるのです。そのために神さまは私たちの心を打ち砕いて謙遜にしようとなさいます。私たちは自分と全く質を異にし、私たちの一切から超越しておられるお方の前に身をさらす時にのみ、打ち砕かれて謙遜にさせられます。だから私たちは聖なる神さまから逃げてはならないのです。

人々の心が打ち砕かれて、悔い改める日がいつ来るのでしょうか。「町々が崩れ去って、住む者もなく、家々には人影もなく、大地が荒廃して崩れ去るときまで」(11節)結局南王国がバビロンに滅ぼされる日が来るまでは、人々の心のかたくなさは砕かれないと神さまはおっしゃっています。悲しい現実ですね。身を滅ぼすような決定的失敗をしなければ、我をはることをやめず、いくら聞いても悟ろうとしないとは、恐ろしいことではないでしょうか。

イザヤはこう預言しました。「まことにあなたは御自分を隠される神。イスラエルの神よ、あなたは救いを与えられる」(45:15)。神さまは聖なる方ですから、私たちからすれば、ご自分を隠しておられる神と映ります。しかし私たちの我を打ち砕いて謙遜にし、聞いて悔い改めさせて救いにあずかせてくださるお方なのです。

私たちは滅びる前に、悔い改めたいものです。皆さんも、そう思いませんか。神さまもそれを切に望んで居られます。

完